

## 【転載に当たって】

この論文は元戸山高校教諭武藤徹先生が、一九七九年に「高校教育」一三号に書かれたものです。引用者はその当時この論文を読んで大変参考になったと共に、自分の母校のことでもあり、「ああ自分達はこういう考えのもとに教育を受けたのだ。」と深い感銘を受けました。

その後この論文を参考にしたいと思いつつも、何という雑誌に出ていたかも忘れてしまい、困っていました。先日 戸山高校の同窓会総会に参加した折に、武藤先生にお伺いしたところ、まだ保存されているとのことで、送って下さるようお願いしました。二日後にはこの論文 の冊子が届きましたが、先生が戸山高校PTAのOB会のために百部作ったものの最後の一冊とのことでした。先生から自由にコピーしてもよいとお許しを頂いたので、多くの人に利用していただければと思い、スキャナーでワープロにうつし、メールにも載せた次第です。

なお、PTAのOB会とは、PTA役員のOBの方々が、何時までも戸山の教育が存続するよという願いをこめて作っている会で、現職の校長、教頭、教員も参加しているとのことです。

(二〇〇二年七月 転載者・薄井敬記す)

(追) スキャナーの精度の関係で、誤字が大分あり、武藤先生や他の方からもご指摘を受けました。今まで分かった部分は訂正したつもりですが、まだあるかも判りません。文の大意は読み取れるかと思いますのでご容赦ください。

### 第三章 歴史と伝統の上に築かれた、 戸山高校の民主教育と課題

武藤 徹

#### 1 はじめに

戸山高校の前身は、東京府立第四中学校である。戦時中のある時期には、五クラスあった第四学年の生徒中、約百名が、旧制高校、陸軍士官学校、海軍兵学校に入学してしまい、第五学年は三クラスになってしまったということもあったようである。昭和十一年現在で、卒業生 五三〇〇余名中、旧制高校在学中三〇〇余、帝大進学者一七〇〇余と記されているから、進学を中心とした、厳格な教育が行われていたと考えられる。

四中の生徒は、学力でも資力でも、府立一中に及ばないから、予習、復習を徹底してやらせ、自学自習の習慣をつけさせないと、府立一中並みの進学はむずかしい、との考え方があったようである。教師の欠勤、出張による空き時間は、できるだけ補充するように努めたと記録されている。

しかし、一方には、四中は優秀な生徒を入学させているのだから、もっと自主的に行動できるように教育する方が将来大成するのではないか、受験の成績だけを考えて学科の学習だけ強制するのは邪道ではないか、という意見もあったようである。

当時の学校運営は「御前会議」と名づけられる校長と一部教員との打合せにもとづいて行われており、職員会議は、単なる伝達の間であったという。

昭和十七年（四二年）に着任した校長は、良いものでも、永くおくと垢がたまるとの考えで、かなり強引に人事異動を行い、リベラルな人を迎えたようである。この年には、それまで禁止されていた野球を、教員有志主催の全校大会という形で、行っている。しかし、戦争が激化して、このような動きも、押し流されてしまった。

敗戦後、教員組合が結成され、全教員が組合員となった。校務分掌は七つの部に分かれ、部長は公選で選ばれた。部長会議は「校長補佐」と名づけられていた。公選とはいえ、メンバーが固定し、校長側近の感を与えていた。分掌は、一人一役の形で、各部の会議は行われなかったから、次第によっては校長から各個撃破されることもあった。

担任や校務分掌の人事は、校長の一方的任命であった。体育、芸術の教員は、担任に任命されなかった。職員会議では、発言は自由で、若い人の発言を歓迎する空気もあった。しかし、校長が議長を兼ねていたから、思い出話が始めると、九時、十時になることもあった。

職員会議とは別に、校長を除く「教育研究協議会」という組織が置かれていた。旧制府立中学校の区立移管反対闘争の街頭行動の先頭に校長が立つような時代のことであった。

## 2 民主化の取り組み

人事に関する不満が爆発して、公選の人事委員会をつくることとなった。二四年（四九年）のことであった。委員会は公開とし、組合の本部委員（分会責任者）がオブザーバーとして参加した。これは後に、全教員を年齢別に三層にわけ、各層から名ずつ選び、最後に教科の偏りなどを勘案して一人選出する制度とした。

朝鮮戦争を契機として、全面講和か単独講和かをめぐって、国論が分かれ、職場の中にも政治的に高揚した雰囲気を作られた。この雰囲気の中で、教師が自分の意見を自由に話すことが定着した。

職員会議の議長制も確立し、分掌の各部の会議も持たれるようになった。善意と責任感から、教務部長が、報告書の作成から紙の運搬まで引き受けるという状態は、解消された。学年主任、学科主任が廃止され、着任順に、一年交替で、世話係が連絡に当たる制度がつけられたのも、この頃のことである。

三二年（五七年）から三四年（五九年）にかけて、

勤評反対闘争が展開された。三四年四月二三日のストライキには、校長の業務命令をけて、ほぼ全員が参加した。三五年（六〇年）の安保改定反対闘争の高揚の中で、校長補佐の制度を廃し、公選の運営委員会をつくることが決められた。

この年から、生徒部と教務部との二部制とし、他に図書委員会と保健委員会を設けた。部長、委員長も、校務分掌の一つと位置づけ希望と承諾の原則に基づいて、人事委員会が原案をつくり、職員会議の承認を求める制とした。なお、任期は、三年を限度とすることにした。公選だけが民主的な制度であるとする形式論理は、とらなかつたのである。形式だけは公選で民主的でも、実際は派閥抗争というのでは、真に民主的とはいえないからである。

校長がかわり、都教育委員会の方針通り、他から教頭をつれてくる動きが見られたので、組合で教頭候補三人を選び、教頭試験を受けてもらったところ、三人とも合格したので、この三人の中の一人を教頭にせよと要求した。結局、校長の背信で実現せず、八ヶ月の着任反対闘争を終結した。分会では、制度要求と当該個人の立場とを峻別していたから、忘年会を兼ねて、分会主催の新任教頭歓迎の宴を張った。

教育研究協議会は、日教組教研大会の報告や、教師の倫理綱領の学習会、生徒の分析と教育理論の建設等に取り組んで、合宿教研を行うまでになっていたが、新教頭も、趣旨に賛同し、第二回分会合宿に参加した。

その後、校長側からの分裂の策動があり、成功はしなかつたものの、一定の影響はあらわれた。分会合宿も困難になったので、教育研究の課題を、職員会議の中に組み入れたり、学習指導、生徒指導の特別職員会議を、それぞれ年二回ずつ、開くようにした。学校群制度が導入されたとき、この特別職員会議は、大きな役割を果たした。高校紛争が大きくな

らなかったのは、この特別職員会議で良く生徒を分析し、的確な対応をしていたことも、一つの要因であったと思われる。

### 3 教科指導の問題

旧制四中時代には、漢文の白文帳を筆で書かせる等、時流に棹刺さぬ独特の風があった。また、予習復習を重視し、授業をおろそかにしない堅実さがあった。昭和一七年（四二年）の改革で、白文帳を毛筆で書くことが廃止される等、一定の手直しはあったものの、時流にこびず、堅実な教育を行う基本的態度は、少しも変わっていないといえよう。

しかし、一方では、学力別クラス編成を行い、出席番号まで学業成績順につけるという極端な学力偏重は、廃止された。また、模擬試験の結果を廊下に張り出すことも、廃止に持ち込むことができた。その限りでは、大きな変革が行われたと言えるだろう。

昭和二二年（四七年）は、新しい『学習指導要領』が制定され、大幅な選択制度が導入された。本校での実施は二四年度（四九年度）からであるか、歴史を全く学習しない生徒、物理、化学を学習しない生徒が出た。職場では、この傾向を憂慮すべきものととらえ、二六年度（五一年度）からは、世界史を必修とし、数学では解析Ⅰ、幾何、解析Ⅱの三科目を全員必修とするなど、一部、手直した。

三三年度（五八年度）からは、芸術、家庭、第二外国語、及び理科、社会の一部以外は、共通必修とした。更に、三八年度（六三年度）からは、芸術を選択必修、第二外国語を自由選択とした以外は、すべて共通必修とした。

いま、この経過を、振り返ってみよう。

二七年を境として、大学進学が、急にむずかしくなった。多くの、いわゆる進学校では、第二学年までに三年間の授業を終了させ、第三学年を受験準備に充てたようである。このことから生まれる弊害は明らかであった。ただでさえ多い内容を、一・五倍のスピードで学習するのであるから、表面的な理解と習熟とに止まってしまう結果になるのである。もっと悪い場合には、授業についていくことが体が困難になるのである。戸山高校では、この傾向を他山の石とし自らはとらなかったのである。むしろ、時間はかかっても、徹底して自分で考えること、自分の力で学習すること、読書することを要求したのである。

選択制度に関していえば、多くの高校で、選択制度こそ、個性を尊重するもので、民主教育の証しであるという議論がまかり通った。この議論は、また、大学進学のため、文科系、理科系に分けることを合理化するものでもあった。戸山高校では、物理、化学を選択しない生徒は、量的科学の認識が欠けるし、生物、地学を選択しない場合には、「進化」の概念がつかめない。民主社会の担い手としては、史的認識は不可欠である。数学を学ばなければ、抽象的論理的思考が育たない。従って、青年期の教育としては、どれも欠かせないものである、という議論をしていた。

また、卒業生の動向を見ると、文科から理科に、理科から文科にと移る者が七割に及んでいた。これは、戸山高校のカリキュラムが、そのことを可能にしたからでもある。何れ

にせよ、個性を尊重しようとして選択制度を強化すると、転科が妨げられ目覚めてきた個性を生かせなくなるのであった。

一見画一的で個性を殺すかに見える教育が、個性を目覚めさせ、本当に個性を尊重することになるものと考えられたのである。

戸山高校では、三年分の教材を三年の三学期までかかって、ゆっくり学習していた。大学「進学」の力をつけるのではなく、大学に入学して学問を研究していける力、いわば大学「就学」の力を着けることを目指していたからである。そのために、浪人も、かなり出た。安保改定反対闘争（六〇年）の時には、「戸浪連」すなわち戸山高校の浪人連合が多数参加した程であった。

この数年前から、浪人のための「卒業生講習会」が、始まっていた。授業は、午後から毎日四時間とし、体育も、ホーム・ルームも置いていた。在校生のための授業には全く影響が及ばないようにしていた。ある学校では、PTA費で講師をやとい、講師に在校生を教えさせ、ベテラン教師は卒業生を教えるという風であったが、戸山高校では、授業は卒講とは無関係に組んで、空き時間に卒講をうめたのである。

青年期の教育として、科学、文化、芸術のあらゆる面で「全面発達」を目指そうとするとき、三ヶ年間では、どうしても不十分であった。卒講では、学習指導要領にとらわれずに、自主的な研究を組織することができた。在学中に基礎を築いた生徒たちが、めざましく伸びていく姿を見ることができたし、反対に、卒業後に力を伸ばすためには在学中に何をなすべきかも、明らかになったのである。ある秋、平林寺に遠足に行った卒講生達が、脱落しかけている仲間をどう励ますかで、相談をした。これを、我々は、テニスコートの誓いになぞらえて「平林寺の誓い」と名づけた。これは、卒講生全体の学習を、引きしめた。

この頃、着任早々の校長が、現役で大学に受かる生徒をもっと多くできないかと、諮問したことがあった。学科会議で話し合った結果、すべての教科が、できないと答申した。現役入学者を若干名増やすことは不可能ではないが、そのために学習全体が受験的となり、基礎がおろそかになる。そうなれば、浪人して飛躍的に力を伸ばすことが不可能になり、結果的には、大学入学者数も減少するし、仮に入学したところで、大学における学習が十分なものになり得ない、というのが、各教科の一致した見解であった。これには、卒講の経験が、大きく役立った。

この時期は、学校群制度の直前の時期であって、相対的には「学力」の高い生徒が入学してきた。しかし、この「学力」というのは、「五%の食塩水と八%の食塩水を混ぜて七%の食塩水を三五〇グラム作るには、おのおの何グラムまぜれば良いか」という問題にはほとんど百%の正答率を示すものの、五%の食塩水の定義が分かるのは、一一%にすぎず、「抽象」ということばの意味がわかる生徒は一人もいないという風であった。つまり、見せ掛けの「学力」とは裏腹に、真の学力は崩壊に瀕していた。その意味では、「教育は崩壊過程にある（羽村教研の分析）」という状態であった。各学科会議の分析も、期せずして一致し、そこから、基礎学力の重視が打ち出されたのであった。着任早々の校長には、見せかけの学力しか、わからなかったのである。

こうした学力の状態に、戸山高校の教師が気づいたのは、昭和三一年（五六年）のことである。二〇年代の生徒の読む雑誌は「世界」「中央公論」のたぐいであつたし、中学時代に微分積分は終わったから、「演算子法」と「行列式」をやりたいという生徒もいた。数学班では、スミス・グランビル共著「高等解析」を英文で読んでいた。三一年入学の生徒は、冗談をいっても笑わなかった。その冗談の意味が、わからなかったのである。誤字や「てにをは」の違いが目立った。三一年の事ではないが一枚の答案で、てにをはを一九箇所間違える生徒まで現れた。多くの教科から、今年の一年生はどこか違っているという話が出された。

遂に、その原因がわかる時がきた。国語科で、今年の一年生は、五十音図が書けないことを発見したのである。二二年に小学校に入学した時から、国語教育の方針が前年とは違っていたのである。つまり教科の学力は相互に深い連関をもっていて、国語の学力が歪めば、すべての教科に影響が出ることが、わかったのである。

現代風にいえば、「習熟度」は高くても、教育の質においては、他校と全く変わらないということであり、日本の教育全体が崩壊過程にある時には、一部の「進学校」だけが例外となることは決してない、ということである。このことは、生徒が義務教育段階でうける教育が同質であることから自明なのであるか、この点は、なかなか理解してもらえないのである。「戸山高校は別だ」という意識が強いのである。

たとえば、人格の歪みが、非行という形で表れたとき、指導はその非行に焦点を当てて行われるから、明確である。それが、非行という風な具体的な姿を示さないとき、人格のゆがみを発見すること自体が困難であり、これを改めることは更に困難であろう。学習面でも全く同じことがいえるのであって、見かけの「学力」の高い方が、問題点の発見は困難で、「特に問題はありません」という形で見すごされやすいのである。それだけに、また、問題の解決も困難である。

戸山高校では、職員室の配置が、学年と分掌中心になっていて、学科の研究室という形にしないで来た。そのために、たえず他教科の教員と情報を交換しあえるので、問題点の発見に役立った。また組合教研に参加することによって、他校の、あるいは他府県の状況がわかり、自校の生徒の分析に役立った。更にまた、地域の教育運動と協力して、小学校、中学校の生徒の現状を知ることによって高校生の見えなかった部分が見えてくるということもあった。教育公務員の兼職をむしろ奨励すべきであるとの見解が生まれる所以である。

義務教育の段階で同質の教育を受けてきたからといって、高校段階の教育も同質であると断定することはできない。各職場における教育観のちがいによって、教育のあり方が全くちがうことも、起こりうるのである。

こうした教育観の違いを示す面白いエピソードがある。戸山高校の「数学班」が、某進学校の「数学班」と交流した時のことである。戸山高校では、スミルノフの「高等数学教程」をよみ、数学史などを勉強していた。相手の高校は、受験問題集を解いていた。戸山高校生が、学問の重要性を話したのに対して、後者の生徒からは、問題を解く意義が語られるという風であつた。結局、この交流会は一年で沙汰済みとなった。

三八年には、ベビーブームの生徒が入学してきた。この時期は、まだ革新都政になって

いなかったから、都は、クラスの生徒増と増学級とで乗り切ろうとした。戸山高校にも、理科室を普通教室にして、一学級ふやすよう指示があった。職場では論議を重ねて、職員室を普通教室とし、教師は各準備室に分散して入ることとした。理科教育の性質上、実験を減らすことは考えられなかったのである。この措置は、たとえば理科の教師と英、数、国の教師の交流を深める結果ともなり、教育の質を高める上でも、役立ったのであった。

東京都で、学校群制度が採用され、従来と異なる生徒が入学して来たとき、ある進学校では、上級生と比較して、駄目だと認識させる指導をした。主観的には激励する意図であっても、生徒は、「制度いじりは大人の責任であって、力のない自分達が入学したからといって、自分達には責任はない」と反発し、これか、当時の政治状況とも結びついて、高校紛争にと発展していった。

戸山高校では、優秀な生徒を他所にとられたために、成績不振の生徒が入学してきたと見るのではなくて、教育の崩壊過程の一環としてとらえ、特別職員会議で生徒の実態を明らかにし、一人の脱落者も出さないで、しかも従来通りの教育水準を維持するには、どのような工夫が必要かを、考えた。分会が、学校群制度反対の闘いに立ち上がったとき、起こりうるあらゆる事態について、詳細に分析してあったから、実際にそれが実施され、予想した通りの結果があらわれても、全く動揺はなかったのである。流石に、学園紛争が、盗人姿にヘルメットというスタイルで現れることだけは、予想できなかったが。

四三年（六八年）に、ある政党の横槍で、当時五校ほどあった卒講（補習科）が廃止されることとなった。公共の建物を使って、教師がアルバイトをしている、というのであった。名目とはうらはらに浪人は十倍以上の金を使って予備校をもうけさせることになったし、予備校講師は、数千万円の収入を得ていると取沙汰されるまでになった。卒講の廃止が、教育の正常化とは無縁であることが、明らかとなった。

四五年に、高校の新学習指導要領が発表になり、四八年（七三年）の新入生から実施されることとなった。この決定に当たって、四五年までに、各教科の役割と学力の問題点について、一年間、学習を深めた。次の一年は、新学習指導要領にもとづいて、学習上の困難が解決できるかどうか、そのために、どんな教育課程が考えられるかを、研究した。次の一年は、具体的な教育課程をつくる作業にあてた。この作業は、困難をきわめた。理科で、物理、化学、生物、地学のどれもが、ⅠとⅡに分割され、しかも、すべてが3単位となったからである。四教科ともⅠだけとすれば、一二単位となり少なすぎる、すべてⅡまでとすれば、二四単位で多すぎる。といて、物理五単位、化学四単位という風に独自のプランをつくると、教材作成が困難であるし、大学入試に不利になるのであった。結局、何としても選択制度をとらざるを得ず、十年に及ぶ統一カリキュラムは、崩されたのである。まことに痛恨のきわみであった。しかし、選択の幅は必要最小限に止まるよう、努力に努力を重ねたのであった。

この頃、学習に関する面白い調査結果が、特別職員会議で発表された。通信添削に取り組んでいる生徒は、すべて上位グループに属しており、予備校に通っている生徒は、下位

のグループに属しているというのであった。中位の生徒の中には、添削、予備校のメンバーが、一人も入っていなかった。

討議の結果、学力が低いために予備校に通うようになったのではなく、予備校に通いはじめて成績が下がったのだという点で、意見の一致を見た。この調査結果は、従来の見解、「在学中に基礎をきちんと身につけていれば、浪人したときにも、力を飛躍的にのばすことができる。余りに早く、進学中心の学習をすると、力をつけることができない」ということを、一層明確に、うらづけることになった。

#### 4 生徒指導の問題

敗戦のあと、生徒自治会が作られた。この「自治会」の名称は、占領軍の「指導」で生徒会に改められるのであるが、その会則の前文は、意気高く述べている。「高校の目的は、真理と正義とをのぞむ人間の育成を期すると共に、普遍的にして、而も個性ゆたかな、文化の創造を目指すことにある。学生は、かかる目的のために学習し、習得した知識と教養とをもって、社会の大多数の利益と、幸福とに貢献することを使命とする。われらは、かかる理想のもとに、自治活動を積極的に展開して、われらの協同生活上の諸問題を解決し、校内の秩序を保つとともに、社会人として、この知識と批判力をたかめ、以て名実ともに恥じなき学園を築き上げたいと思う。われらは、生徒会の権限を守り、これに対する外部的圧迫とはあくまでたたかい、いかなる専横と盲従をも排除すると共に、放縦と軽拳とを慎んで、戸山高校生総意の上に立つわが生徒会を民主的に運営し、全力をあげてこの理想と目的を達成することを誓う」これは、現在も、そのまま生き続けている。

多くの学校では、教師の側で、生徒心得を作っている。四中にも、きびしい生徒心得があった。敗戦後、教師側は戦時中の教育について、かなりきびしい反省を強いられた。そこで、戦後は、生徒会に「生徒規範」をつくらせた。生徒部でも、一定の指導を行ったが、意見が一致しない点については教師側の意見をきちんと伝えつつも、生徒の判断にまかせ、歴史の検証をまつこととした。歴史の検証には、長い時間はかからなかった。すべての案件について、教師側の判断の正しかったことが、明らかとなったのである。この点に関して、往年の生徒部長は、戸山高校の教育のめざすものは、自主性と連帯性と、教師の指導性とであるとまとめたが、言い得て妙であった。

朝鮮戦争開始後の、政治的に高揚した空気の中で、生徒会が卒業式に君が代を歌わないよう申し入れてきた。職場でも、そういう意見は出ていたし、そのために卒業式に参列しない人もいたから、これを認めることとした。二七年（五二年）の三月のことであった。

この年、日本のカメラマン達が生命をかけて守りぬいた原爆の写真が、公開された。生徒会は、文学班、写真班、数学班、社研班、運動班等、多数の班の協力を得て、「原爆展」を学園祭の中心にすえた。

この年は、また、戸山高校の前の米軍射撃場の銃声問題が起きた年でもあった。機関砲の射撃訓練まで行われるようになり、授業がしばしば中断された。生徒会も、教員と協力して、この問題の解決のために、努力した。その効があって、二八年には、射撃場の朝霞



への移転が しまった。この頃、生徒会は、交通信号の設置や、高田馬場駅南口の設置のために積極的に動き、成果をあげた。

安保改定反対闘争のとき、憲法の規定と、学校教育の立場について、一定の判断が必要とされた。戸山高校では、学 校内外を問わず憲法の規定は優先的に守らなければならないことを確認した。その上で、校内組織は、校内活動のためのものであるから、校内組織の名において 政治的行動を行うことは、ふさわしくないと考えた。また、請願や街頭行動に過大な期待を抱いた結果、挫折感をいただくに至ることをおそれて、事前に十分な指 導を行った。そのために、挫折からニヒルになる傾向は、かなり防げたのではないかと思われる。

昭和二五年（五〇年）から行われてきた演劇コンクールが、三二年（五七年）以来学園祭に吸収されたことから、学 園祭の性格が、部班とホーム・ルームの並列参加の形となっていた。此の頃、ホーム・ルームでは、年間統一テーマに取組み、学園祭をその中間発表の場とする ことが行われた。教科書検定制度の問題、憲法の問題、能研テストの問題、ベトナム戦争等、すぐれた研究が行われた。障害児問題にとりくみ、一生を障害児教 育に捧げる決心をした生徒もあらわれた。

戸山高校生徒会には、「自治懇話会」という組織がある。学校生活に関わりのある問題が起こると生徒、教師の有志 が集まって、自由に意見の交換をするのである。修学旅行、選択制の問題、クラス替えの問題、ホーム・ルーム合宿の問題など、数多くの問題について話し合い が持たれ、理解が深まった。

四三年ごろから全国で高校紛争が展開された。戸山高校も例外ではなく、早大文学部の「活動家」の影響が校内にも 及んだ。「主体性を確立せよ」という訴えのチラシが、校内でまかれたこともあった。この文章は、早大文学部で撒かれたものと全く同文であって、字体まで が、そっくりまねられていて、生徒達の失笑を買った。

四四年度（六九年度）生徒会執行委員長選挙で、一部「活動家」の立てた候補者を新聞部が批判したことを契機にし て、紛争は激しい形態に移行した。教職員の制止を無視した、授業中の校内デモ、校内集会の類いで、暴力沙汰や校内施設の破壊等のことはなかった。校内民主 主義を守り、発展させてきた教職員の言動が攻撃の対象にされたが、多数の生徒が事実無根であることを証言し、彼等も「謝罪」せざるを得なくなった。

ある日、彼等は、図書館を占拠した。生徒会の図書委員会は、直ちに委員会を開き、「生徒の学習権を奪うものであるから、直ちに退去して貰いたい」という申し入れ書を手交した。二時間目のことであった。彼等は、対応に苦慮したようであるが、午前中には退散した。

四四年度の卒業式には、彼等は演壇占拠を行ったか、予定通り、直ちに教室毎の卒業式に切替え、支障なく式を終えた。彼等が卒業すると、紛争も終息した。紛争で深い傷を負った高校との比較で考えると、本校の紛争は、「軽かった」といえる。その理由を考えて見よう。

その一つは、本校が作り上げた自由な校風である。生徒の活動に関しても、掲示・印刷物等の検閲は一切行われておらず、その他生徒の自由は、すべての面で基本的には保障されている。生徒が「反動的」と見ていた教員が「正規の手続きで教室が借りてあれば、中でどんな集會が行われても干渉はしない」と述べたことが、いまでも語り草になっている。

また、教師の側について言えば、教師の教育活動の自由も、校内的には慣行として十分に保障されており、さまざまな社会的、政治的問題に関して個人的な見解や意見を生徒の前で自由に表明する事も、当然のこととして認めあってきたのである。この点は、生徒の教師に対する信頼を作り上げる基礎として重要であったと思う。高校によっては、生徒の提起する問題に対して、教師が個人的見解を表明することを一切せず、職員会議で打ち合わせた統一見解だけを表明したために、「口うらを合わせている」と受け取られて、信頼を失ったという。

第二は、選択制の問題、修学旅行の問題、評価の問題、模擬試験の問題、クラス替えの問題、卒業生講習会の問題等、高校教育に関するあらゆる問題に関して、その都度、深い討議が行われてきたことが、あげられる。どんな問題が生徒会から提起されようと、戸惑うことは決してなかったものである。「活動家」は「先取りされている」と口惜しがったが、二〇年間の教育理論の蓄積には、歯が立たなかったのである。

第三には、「活動家」こそが、テスト的思考の典型であり、その意味では、一般生徒も同一の基盤に立っていることを見抜いて、この考え方を批判し、きちんとした学習に力を注いだことが、あげられる。主体性についての正確な認識をもった生徒が、「主体性を確立せよ」という主体性のない訴えを失笑をもって迎えたのは、当然である。その意味で、教員が、この問題を治安対策の観点でなく教育問題として真正面から受け止めたことが、良かったと思うし、歪められたとはいっても、一定の基礎学力をそなえた生徒であったからこそ、「きちんとした学習（オーソドックスな勉強）」が、それなりの成果をあげ得たのであろう。ことに、「活動家」の属する第三学年に隣接した第二学年の担任団の努力は、正常な教育をすすめる上で、大きかったと思う。

全国的に高校紛争が終熄に向かうと、高校生の中に、新しい歪みが目立ちはじめた。

1. 社会的、政治的関心が著しく弱まったこと。
2. 連帯感が失われ、組織無用論がひろがったこと。

(3) 学習に対する姿勢がゆがみ、塾、予備校に傾斜するようになったこと。

(4) 喫煙、飲酒等の顎廢現象がひろがったこと。

高校紛争の遺産とも言うべき、右のような生徒の状況に対してどのような指導を展開すべきかということは、緊急の課題であったが、同時に、それは簡単に解決できる問題ではなく、時間的にもかなり長期にわたる継続的な指導の積み重ねが必要な問題であった。生徒指導の特別職員会議でも、この問題が討議された。

戸山高校では、「処分」という考え方をとらずにきた。「相場」があって、どの罪はどれだけの処分というのは、最も非教育的だからである。処分に服すれば免罪された気持ちになるし、処分されなかった者をうらやみ、不公平な学校をうらむことになる。逆に、処分を受けた者は箔をつけたことになる。そうではなくて、何が悪かったのかを徹底して反

省させるのである。反省が足りなければ、更に考えさせる。こうして自分の行為の意義を、自分の生活態度の問題として、把握させるのである。

飲酒、喫煙の問題でも

(1) 処分や、監視体制、摘発主義はとらない。

(2) 生徒達の中で喫煙、飲酒が容認される雰囲気を変え、お互いにそうした行為を許さない世論を、醸成していくことを目指す。

(3) そのために、一方でホーム・ルームの連帯と団結の回復を目指すと共に、生徒会の各レベルの自治組織を中心に、全校的な規模での、生徒達自身の運動に、発展させる。

(4) そのために、生徒会自治組織自体を強化し、指導性が発揮できるようにする。

という方針を定めた。

生徒達の中の頹廃現象を撲滅するために、生徒会の各自治組織の強化を計り、自治活動の活発化を目指すという方向は、さらに、これによって学校の外に向けた生徒達の顔を、再び校内の生活にむけ直すことが期待できるし、更に、自治活動の中で学習問題を取り上げさせることによって、高校生にとっての学習とは何かと言う問題を考えさせ、受験体制による彼等の学習観のゆがみを、多少とも回復させることが期待できると考えたのである。

五〇年度（七五年度）後期執行部は、三年生の教科目選択の問題を取り上げた。その結果、二年生に対して、科目選択の説明会をひらくこと、教育課程の一部を変更すべきことを、要請することとなった。教務部は要請を受けて説明会をひらいた。また、教育課程は、校務運営委員会の検討を待って、日本史を三単位から四単位に増加することで解決した。五一年度、五二年度には、花壇の造成、芝生の育成が、全校的な運動として展開された。五二年度から五三年度にかけては、HR合宿を再開する運動が、展開された。

生徒会の活動が活発化すると、喫煙、飲酒の問題にも、対処できるようになった。あるクラスが学園祭のために作製した映画の中に、高校生が喫煙、飲酒を行うシーンがあった。教師側は上映禁止とか、カットを命ずるとかの方途に出るのではなく、生徒会としては、どのような対応を取るのか、考えさせる指導を行った。

生徒会の中には、「生徒規範」の解釈と運用に当たる「規範運営委員会」があり、ここで、この問題を審議した。委員長は、審議結果を全生徒に報告し、学園祭参加作品に対する自粛と共に、この種の行為に対する明確な批判を打ち出した。執行委員長は、この方針を受け、五一年度新入生オリエンテーションで、学習に対する心構えと共に、塾、予備校に走ることの非を訴え、喫煙・飲酒を厳しく戒める演説を行っている。以来、学園祭参加作品に、この種の場面が登場することはない。

高校紛争以来、多くの高校の学園祭は、娯楽的傾向が強く、お化け屋敷や金魚掬い、喫茶店が流行している。戸山高校でも、HRの年間統一テーマの中間発表という形が失われ、娯楽指向が強まったが、教師側の、HRや生徒会を通ずるねばり強い指導で、今日のような文化的水準の高いものに引き上げることができた。この過程で採用された表彰制度は、学園祭の水準を引き上げる上で、一定の役割を果たしたといえる。

一年生は、中学時代には同じ質の教育をうけてきたのであるから、他の高校と何等かわりはない。ただ、（生徒会の）戸山祭運営委員会の組織的指導で、戸山祭の性格を認識させられる。そして実際に戸山祭を経験して、三年生の演劇や映画の水準の高さに、圧倒される。そして、その高い水準をめざして、取組みを強めることになる。もし、戸山祭が、他の高校の文化祭と異なる面をもつとすれば、ここに、その理由を求めることができるだろう。

## 5 学級父母会と教育懇談会

教育を進める上で、父母の力は大きい。戸山高校では、二〇年代の後半から、細々と父母会が行われ、学級通信が出されていたが、全体のものとはならなかった。

昭和三三年（五八年）からの勤務評定反対闘争では、校内委員会が中心になって、地域の労働組合をまわり連帯を訴えた。

三五年から三八年までは、高校全入運動が全国的に展開された。この時期は、また、文部省の学力テスト反対闘争の盛り上がった時期でもある。校内委員会は、新宿教組と協力して、地域の父母集会を組織した。このとき、区内の各地に教育懇談会がつくられ校内委員会のメンバーが、助言に参加した。こうした活動の経験に学んで、戸山高校でも、毎月、あるいは隔月の父母会が、いくつかのクラスで行われるようになった。三八年（六三年）の能力開発研究所テスト反対の取組みでは、分会の学習会も熱心に行われ、地域の学習会も二〇回以上もたれたが、いくつかの父母会でも、学習会が持たれた。その父母会のメンバーが、地域の父母を集めて学習会を組織し、担任の教員に助言を求めることもあった。

昭和四二年（六七年）に学校群制度が採用されると、父母との連携の必要性の認識はさらに進んだ。従来の父母会が、どちらかという成績、受験の話に傾斜しがちであったのに比べ、教育問題中心の父母会に変質してきた。例会ごとに通信を発行するクラスも、出てきた。話題が、子供の問題、教育の問題に止まらず「私達の戦前・戦後を語る」「婦人問題の研究」「古典読書会」等、自分の問題を考える方向にと進んだクラスもあった。

高校紛争の時期には、父母が直接生徒の状況を見ながら話し合うこともでき、高校紛争の本質について隔意なく話し合うことができた。学校長も「父母会を始めとする父母との緊密な意思の疎通が、本校の紛争の拡大を防いだ」と評価したほどである。このときに、第二学区の父母の要望でつくられた、父母と教師の教育懇談会は、十年後の今日も、重要な教育相談の場となっている。

昭和四六年（七一年）一月に、日本共産党の区政政策発表会に参加した校内委員の一人は、戸山高校に隣接する、都バス戸山車庫を移転し、跡地を都営住宅とする政策が、いよいよ実現するとの報告をきいた。分会でも、騒音対策上、車庫を移転させること、及び校地を拡張することを要求していたから、校長や父母会に働きかけ、払い下げ運動に取り組んだ。運動は、父母を中心とする「戸山高校環境を守る会」が進めることとし、学校、分会も協力して、十日足らずで一万二千名を越える請願署名を集めた。このようにして、約一千平米の校地を拡張できた。日常的な父母との接触があったからである（払い下げ運動を進めてきた日本共産党が、父母の要求に耳を傾ける姿勢を持っていたことを忘れることはできない）。

主任制反対闘争では、校内委員会と戸山会の運営委員会とが話し合いを持ったが、父母から清掃がきたない等苦言も率直に出されたが、日常の教育に寄せる信頼も表明され、分会の主張は、納得されたのであった（戸山会はPTAであるから、学校長、教頭も同席して、このような話し合いがもたれたのであった）。

また、この問題に関するアンケートでも、自分の子どもが毎日受けている教育について全く知らない父親が書いたと思われる、組合を敵視する二、三の例外を除けば、圧倒的多数は、戸山高校の教育を信頼し、主任制に対する分会の姿勢を支持するものであった。ここでも、日常的な父母との接触の重要性を痛感したのであった。

## 6 おわりに

「日本の教育は、崩壊過程にある」これは、いまから十七年前に、都高教がはじめて行った合宿教研（羽村の国民宿舎で行ったので、羽村教研と呼びならわされている）の分析である。この分析は、基本的には現在もかわらない。戸山高校でも、二七年からの受験競争の激化、三一年からの言語能力の減退、テスト的思考の徹底、文化班の衰退、紛争、頹廃、連帯感の欠如等、次から次へと問題が起こったが、その都度、英知を集めて、打開してきた。

現在、戸山高校が直面しているのは、基礎学力の低下と、受験への傾斜である。言語の未成熟も一つの要因となつて、基礎学力の低下が目立ちはじめた。死らない（知らない）、偶然（偶然）、倒達（到達）、体型（体系）等、誤字が目立つ。科学は「いかに」を研究するもので、哲学は「なぜ」を研究するものだ、という飛んでもない誤解を、三年生の多数が改められないでいる。

一、二年生の数学の学力低下も目立ちはじめた。これに対しては、数学科で統一追試験を行い、不合格者には数週間にわたって講習を行った上で再追試を行う等、教科ぐるみの努力が行われている。

学園祭は、文化水準も高く、一見、国立大学共通テストの影響は皆無であるように思わせる。しかし、過熱にさえ見える背後で、今年の「亜流」が目立つ等、停滞もはじまっている。この状態に対応して、三年も三学期に入ると、一方に欠席者数名のクラスがあるかと思うと、一方に欠席者十数名のクラスがあるという状況がうまれてきた。「受験に必要な」教科を放棄しようとした生徒達が、戸山の三年間に学んできたものは何だったのかという指導をうけて、辛うじて立ち直るといった状況もあらわれた。「共通一次テスト」の影響は、三年生だけに止まっていない。

かつて、東京府立四中から戸山高校への大変革を準備した人たちも、二人、三人と戸山高校を去っていく。生徒達の回転は、もっと速い。その意味で、戸山高校の教育は、現在、百尺竿頭に立っていると言えるかもしれない。いままで、継承し発展させてきた教育を、一歩進めるのか、とうとうたる時代の流れに押し流されて、現状を追認する方向に進むのか。新指導要領の実施をひかえて、いまこそ、戸山高校の真価が問われているのであろう。

（七九年『高校教育』十三号所収）